

報告

短期学外実習「国際文化理解演習」に関する報告  
—IDI を用いた試みについて—

A Report of “Understanding Seminar of Foreign Culture”:  
An attempt of using IDI in the Class

吉原秋\*<sup>1</sup>, 熊本早苗\*<sup>1</sup>, クリスティン・ウィンスカウスキー\*<sup>1</sup>  
Aki YOSHIHARA, Sanae KUMAMOTO and Christine WINSKOWSKI

**Keywords:** IDI, Short-Term Study Abroad, Intercultural Development, Cross-cultural Awareness  
IDI 調査, 短期学外実習, 異文化理解発達度

1. はじめに

本報告は、岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科（以下国際文化学科）において実施されている短期の海外実習の授業内容を記録するものである。

語学習得目的であれ、異文化理解が目的であれ、一般的に考えれば、より長期間に異文化と接触したほうが顕著な効果を挙げられるであろう。しかしながら、短期大学部においては、2 年間という限られた期間の中で、例えば 1 年間で学外実習に費やすとすれば、逆に大学自体のカリキュラムの存在意義が問われかねない。また、学生の費用負担の観点からも、実行は容易ではない。そこで我々は、たとえ短期であっても効果的な研修内容について検討し、授業内容の改善に取り組んでいる。本稿では、文部科学省から一定の評価を受け特色 GP に採択された 2006（平成 18）年度から開始され 2009（平成 21）年度まで継続した取り組みを総括する。

「国際文化理解演習」として開講されている海外実習は、単なる語学研修ではなく、異文化体験によって異文化理解を促進する狙いの下に実施されている。従って、授業の成果は、語学力の向上とは別に、参加学生の異文化理解のあり方がどのように変化したか、によって測られる必要がある。そこで我々は、その変化を知るための一つの手段として、異文化理解能力調査 Intercultural Development Inventory (IDI) を用いることとした。IDI は「異文化感受性発達モデル」に基づき、人が文化的差異にどのように対応しているかの段階を測定するものである。厳密な検証は途上であるが、短期であっても海外実習は一定の有効性があることを示す目安として用いることとした。

本稿ではまず、国際文化学科における短期学外実習の内容および特色を、韓国コースとアメリカコースについてそれぞれ説明する。次に、平成 18(2006)年度入学の学生を対象として、1. 全学生の入学時と卒業時の IDI スコアの比較、2. 海外実習参加

学生の、旅行前と旅行後の IDI スコアの比較、3. 参加学生と不参加学生との間での入学時と卒業時と IDI スコアの再比較をそれぞれ行い、海外実習が参加学生に対して異文化理解能力の開発を促す契機となっているのかどうか、を検討する。

2. 国際文化理解演習について

2-1. 授業の概要について

国際文化学科では、1 年前期のカリキュラムに「国際文化理解演習 I」、後期のカリキュラムに「国際文化理解演習 II」を位置づけ、韓国コースとアメリカ合衆国コースを設けて事前研修、現地研修（学外実習）、事後研修を実施している。1 年次という早い時期に異文化体験をすることにより、その後の学修成果を上げるとともに、異文化理解を促進させることが狙いである。過去 5 年間の参加者数は下記の表のとおりである。

年度	韓国	米国	合計	学生数	割合
2006 (H18)	11	20	31	59	53%
2007 (H19)	4	23	27	51	53%
2008 (H20)	5	15	20	52	38%
2009 (H21)	8	13	21	51	41%

表 1 「国際文化理解演習」参加者  
(2006(平成 18)年度～2009(平成 21)年度)  
(2006(平成 18)年度のアメリカ研修は定員を 20 名と限定して選抜試験を実施した唯一の年度)

韓国コース、アメリカ合衆国コースともに、自らの文化（日本・岩手）を他文化に紹介し、異文化（韓国・アメリカ）を学ぶプログラムを設けており、異文化における自文化紹介プレゼンテーションと、帰国後の研修報告会での成果報告を経て、自

\*1 国際文化学科

文化、異文化、そして自文化における異文化の受容を考察する機会を設けている。

事前研修では、現地研修に必要な会話や研修先の歴史等の知識の習得に加え、上述の自文化紹介のための準備に多くの時間が割かれる。

現地研修の実施時期は、韓国コースが9月下旬から10月初旬にかけて現地実習を実施している。アメリカ合衆国コースは2月中旬から3月初旬にかけて実施している。いずれも現地実習期間は約2週間である。

「国際文化理解演習」の学習効果は、後述のとおり、事後研修としてコースごとに実施される報告会・報告書を通して、担当教員はもとより他の教員によっても確認される。それ以外にも、毎年、卒業研究において海外実習での経験に基づいたテーマを選ぶ学生がいることから、異文化体験が参加学生に与える影響の大きさは窺い知ることができる。異文化理解の促進については、海外実習の事前事後に IDI（異文化能力理解調査）を実施して成果を検証している。

また、諸般の事情から現地実習に参加できなかった学生も異文化理解の経験が共有できるように、学科の全学生対象に研修報告会や国際文化講演会を実施しているほか、2008（平成20）年度からは新たに「多文化共生論」を1年次のカリキュラムに導入し、異文化理解教育の充実を図っている。

## 2-2. 韓国コースについて

国際文化理解演習の韓国コースは、「日本の文化と歴史に大きな影響を与えてきた韓国の文化・歴史・風土・生活に直接触れること、また韓国の学生たちと交流することを通して、異文化を理解するに当たっての態度や心構え、国際文化を理解するための見識を深めること」を目的としている。参加学生は、ほとんどが韓国語の初修者であり、入学時の4月からハングル・韓国文化の授業を履修し始めたばかりである。従って、現地で直接に語学を学習することよりも、異文化体験によって学修意欲を高めるという研修目的を、より明確に意識したプログラムが組まれている。

約2週間の海外実習プログラムは、大きく分けて三つの部分から構成されている。

第一には、慶尚南道晋州市の国立慶尚大学校師範大学日語学科における研修である。日本語教師を目指す学生とともに、学生自身が設定した課題に従って聞き取り調査を行い、日語学科で口頭発表を行った。学生宅へのホームステイも含め、学生同士の交流を中心とした異文化接触の過程が重視されている。一方で、事前研修に基づく学生発表という自文化発信の機会も設けており、この2年間は特色GP選定によって得られた予算で購入したビデオ機材を用いて、出発前に大学生活や岩手の様子を取材・編集したビデオを相手校で上映した。

第二に、ソウル市の私立慶熙大学校国際教育院では、外国人留学生向けのカリキュラムの一部を体験する。ハングルの授業、テコンドーの体験学習の他、特別に依頼した教授陣に比較文化

の講義を受けた。ここでは、ホームステイ先の学生が日本語を話せない場合もあり、慶尚大学校とは違った形での交流を経験することになる。

第三に、史跡・博物館見学を中心とした日程も組まれている。事前学習を踏まえた世界遺産の仏教史跡等の見学から、学生に韓国と日本、ひいては東アジア全体のつながりを考えさせることを目的としている。過去には、取えて福岡から海路で釜山に渡り、地理的關係から両国のつながりを実感させた研修もあった。

帰国後は、1年次の学生を対象とした報告会が実施される。研修に参加した学生たちは、そこで、慶尚大学校での聞き取り調査の結果を中心に、自らの体験と学習内容を発表するとともに、海外実習中に撮影し自分たちで編集したビデオも上映した。ここでは、参加しなかった学生に発表するという過程を通して、学生が主体的に自らの学びをふり返り、成果を確認することが可能になる。

報告会を踏まえ、年度内に報告書を作成する。聞き取り調査の結果を中心に、研修中の日誌等も加え、研修の集大成的内容になっている。この報告書は毎年、慶尚大学校師範大学日語学科及び慶熙大学校国際教育院にも届けられている。

この時期は、ビデオ・プロジェクトを積極的に活用したことが特徴でもある。学生の主体性とプレゼンテーション能力の向上を図るために、デジタルビデオ機材が整った後の2007（平成19）年度以降、韓国コースでもビデオ・プロジェクトを採用した。事前研修の一環として撮影・編集したものを慶尚大学校師範大学日語学科で発表し、海外実習中に撮影したものを事後研修として編集し同級生に発表する、という連関によって、学生の異文化理解力を高めると同時に、自ら課題を設定し解決にあたる能力も育てられていく。

さらにこの実習の大きな特色は、慶尚大学校師範大学日語学科の学生との共同作業が組み込まれている点である。韓国に行って一方的に教わってくるという態度ではなく、日語学科の学生との聞き取り調査及び交流の過程で日本語や日本文化について伝え、お互いに教え合い語り合うという、相互的な関係が重視されている。帰国後もメール文通が続くケースもあり、継続的な交流が生まれた。

以上のように、韓国コースでは、語学研修に特化せず、より広い視点から異文化について考える機会を提供している。参加学生の多くは研修後、「自分が日本や岩手についてほとんど知らないということがわかった」という感想を持つ。異文化体験によって自文化に対する目がひらくという成果が達成されていると言えよう。また、韓国内においても首都と地方という二つの大学で研修を行うことによって、一国内での多様性に気付くという効果ももたらされている。

## 2-3. アメリカ合衆国コースについて

アメリカ合衆国コースでは、主にワシントン州とハワイ州のいずれかの州における大学あるいは短大を拠点として、語学研

修とともに異文化を体験する研修を実施してきた。ワシントン州では、ワシントン大学、イースタン・ワシントン大学、ノース・シアトル・コミュニティ・カレッジのいずれか1校において実践的英語運用能力の向上を目指して約2週間の語学研修を行っている。ハワイ州では、ハワイ・パシフィック大学における正規語学研修プログラム（4週間）のうち2週間参加し、他国からの留学生とともに英語を学ぶ経験を得た。アメリカの歴史や文化を学ぶ多様なトピックを基に、英語での聴く・読む・書く・話す能力を伸ばしている。語学研修プログラムへの参加は、多文化社会アメリカのキャンパスで学ぶことにより、アメリカの高等教育機関の教育の一端をかいま見る体験ともなっている。

学生は滞在期間のほとんど（約2週間）をアメリカの家庭にホームステイし、現地の生活様式を体験する。エスニック・グループごとに異なる家庭生活を経験し、アメリカの多様性に気付く契機ともなっている。二人一組で一世帯に滞在しながら、公共交通機関を用いて研修先の大学あるいは短大まで通学することにより、チームワークや自律性も培われていく。参加者の大半が帰国後もホームステイ先と連絡を取り合い、草の根の国際交流を実現させている。

本コースの課題は、年度によって多少の違いがあるが、主に次の五つである。

- ① 英語日誌（毎日）
- ② ビデオ・プロジェクト（実地研修の様子をビデオカメラで撮影し、帰国後にPCで編集して上映）
- ③ メモリー・ページの作成（実地研修の様子を撮影した写真や見学先の資料を基に構成し展示）
- ④ 研修報告書（英語）
- ⑤ リサーチ・プロジェクト（興味あるテーマについて調査・分析し、報告会で発表）

特に2006（平成18）年度からは、特色GP予算の獲得によって購入した機材を活用すべく、ビデオ・プロジェクトを積極的に導入して、研修先での国際交流や帰国後の報告会の内容の充実を図った。

また、本コースの事前事後研修においては、講義や個別指導のほかに、e-Learningを併用している点も特筆すべき点であろう。アメリカ研修のサイトには、講義で用いた資料のほかに、各種テーマの関連サイトもリンクしている。これには二つのメリットがある。渡航前の時点で、現地の地理や気候、交通機関（バス路線や時刻表）のように、生活する際に必要となる実質的な情報を予習しておくことが可能である。また、現地研修や事後研修においても、英語学習の自学自習に役立てることができ、リサーチ・プロジェクトに関しては、学術的に信憑性があるサイトへ自動的に入ることができ、そこからさらに各自の興味に沿って調べ学習を展開することが可能な仕組みとなっている。すなわち、学生の自主的な学習を促進し、支援する体制をe-Learningの併用によって目指している。様々な事務手続き等の連絡事項も、e-Learningを通じて参加学生に一斉配信して

いるため、情報の迅速な共有にも不可欠となっている。教員は随時、参加学生のe-Learningサイトへの履歴を確認しながら、学生の学習状況を把握するよう努めている。

アメリカ合衆国コースの報告会は、帰国後の事後研修を経て、2年次の前期において実施している。報告会では、宣伝広報、会の司会運営、展示・発表・ビデオ上映のすべてを学生が主体的に担い、①語学研修について、②ホームステイについて、③アメリカ文化について、④リサーチ・プロジェクトについて、⑤研修で学んだことについて、等を報告し、編集したビデオを上映している。自らの研修成果を発表することで、参加者は学外研修をふり振り返り、改めて自文化と異文化を意識する機会となっている。聴衆の1年次生にとっては、研修参加者の体験談に触れる機会である。特にアメリカ合衆国コースを希望する者にとっては、自らの学外研修の全体像を予測できる報告会となっている。

### 3. IDIによる効果検証について

#### 3-1. IDIについて

異文化理解能力調査（IDI）はミッチェル・ハマーとミルトン・ベネットによって開発されたものである（Hammer & Bennett, 1999, 2001）。IDIは、ベネットの有名な「異文化感受性発達モデル」（Bennett, 1993）に基づいている。そのモデルは、人々が外国の文化を経験するにつれて、（うまくいけば）認知した文化的差異に徐々に順応、適応し、最終的にはそれを統合することができるようになるという、異文化理解能力発達の連続性を説明するものである。

この発達モデルの最初の「自文化中心的」段階（Bennett, 1993）においては、自己の文化の現実こそが、人の世界観の中心である。始めのうちは、人は文化的差異が存在していることにおそらく気づかないか否定するだろう。そのような人は、おそらく、大雑把で未分化な認知カテゴリー——例えば、アジア人もヨーロッパ人もみな、本質的には同じだ、というような——を持っている。文化的差異の存在を否定できなくなると、たいていの人は他の文化を脅威と見る段階に進むといわれている。この段階にいる人が他の文化を誹謗し自分の文化を持ち上げるのは——例えばステレオタイプを使用してだが——珍しいことではない。最終的には、その不快な文化的差異を、最小化することによって処理する。この段階の人は「人間は実際どこでも同じものなんだ」と単純な主張をするかもしれない。

発達モデルの、「文化相対的」段階への発展的移行はその人の認知構造の根本からの転換を必然的に伴う。自己の文化を現実の中心としてみなすことから移行して、人々は、すべての文化がその参与者にとって現実を体系づける方法を構成している、ということに気付く。そのようにして、人は、自分自身の文化がそう見えるのと同様に、異文化はその参与者には正常で中心的である、という認識をもつ。文化的差異が脅威ではなくなり、この段階の人々は彼らが認知する文化的差異の諸カテゴリーをより卓越した精緻なものとして発達させる。その初めの段階

は受容の状態——（個人としては自己の行動規範や価値観を優先させ続けながら）行動や価値の違いを承認し尊重する状態——である。次の段階では、人々は、他の文化から参照した新しい枠組みを組み入れて、行動とコミュニケーションの新しいスキルを発達させることによって適応する。最終段階では、人々は、完全に機能本位で、適切な、多様な文化的枠組みを参照しながら、意味の構築をしていくにあたり、文化理解の諸方法の間を自由に行き来していくだろう。

IDI は、文化的差異へのその人の認知構造（または世界観）を、一連のスケールで測定する。「否定／防衛スケール」が測定するのは、どの程度他の文化が、未分化で別個の「他者」として単純化されたりみなされるか、ということである。「逆転スケール」は（「否定／防衛スケール」の逆のものとして）自己の文化と対比して他の文化を高めるものである。「最小化スケール」は、諸文化の類似性と普遍性が強調され、差異が最小化される世界観を反映する。「受容／適応スケール」が測定するのは、複雑な文化的差異を受容しそれらの差異に適応することを通じた発達度合である。最後のスケールである、「要約的周縁性スケール」が測定するのは、諸文化からの疎外の状態である。「建設的周縁性のための最後のスケール」は、文化の諸枠組みの間を自由で完全に機能的に行き来できることを反映するものだが、構築中である。

これらのスケールでの測定値は、IDI を受け取る人のために二つのプロフィールに結び付けられる。一つ目は、「総体的異文化感受性自己認知プロフィール」であり、それはすなわち、自分自身の異文化にわたる意識と理解力を、人がどのように認知しているか、ということである。二つ目は、「総体的異文化感受性発達度プロフィール」であり、それはすなわち、このツールによって測定されるような、文化的差異への実際の感受性である。（「自己認知プロフィール」が一般的に「発達度プロフィール」よりはるかに高数値を示すことは特筆されてもいいかもしれない。そのことが示唆しているのは、人々が、実際にそうであるよりももっと、自分は文化的に発達していると思っている、ということである。）

### 3-2. 調査方法

IDI は、TOEIC や学内の英語技能評価など、他の基準とともに1年次の入学時および2年次の卒業時に実施され、加えて海外研修参加者に対しては渡航前と渡航後に実施されている。IDI の日本語版が使用され、学生はその調査を仕上げるのに必要なだけの時間を与えられる。

本研究の目的のために、我々は、2006（平成18）年度生である総数59名の学生に着眼した。IDI は、2006年4月の入学時と2008年1月（卒業年次）に実施された。1年次において「国際文化理解演習」が実施され、11名の学生が韓国研修旅行に参加、20名がアメリカ研修旅行に参加し、合計で31名の参加者があった。IDI はこれらの海外実習の事前と事後に実施した。以下、この学生群を2006-2008年コーホートと呼ぶ。

この2006-2008年コーホートについて、さらに下記のグループ分けを行いながら、それぞれの「自己認知プロフィール」と「発達度プロフィール」を、付随するスケールを用いて比較していく。

1. 2006-08年コーホート全体の入学時（2006年4月）と卒業時（2008年1月）のIDIスコアの比較。これはそのクラスの基準値と、2年間のカリキュラムの結果としてのIDIの変化を提供してくれる。

2. 2006-2008年コーホートの中で、韓国・アメリカ研修旅行の参加学生の、旅行前と旅行後のIDIスコアの比較。これは、短期海外実習の結果としてIDIスコアに変化があるかどうかを我々に示してくれる。

3. 2006-08年コーホートを、旅行参加学生と不参加学生に分けて、入学時（2006年4月）と卒業時（2008年1月）とを再比較。これは、海外研修旅行に関心を抱いた学生とそれに行かなかった学生との間に、前もって違いがあったかどうか、またその興味関心が卒業年次まで持続したかどうかを我々に示してくれる。

### 3-3. 調査結果と分析

1. 2006-08年コーホートの入学時と卒業時の比較。

入学から卒業までに2006-08年コーホートのIDIスコアは異文化感受性自己認知プロフィールも異文化感受性発達度プロフィールも共に増加した（表2参照）。

2006-2008年 コーホート	異文化感受性 自己認知	異文化感受性 発達度
入学時 (n=59)	117.49	83.03
卒業時 (n=51)	118.28	85.01
増加=	0.79	1.98

表2. 2006-08年コーホートの入学時と卒業時のIDI異文化感受性の自己認知および発達度プロフィールのスコア

表2から見て取れることは、入学時から卒業時までの異文化感受性自己認知プロフィールに0.79というかなり控えめな増加量があり、異文化感受性発達度プロフィールの1.98はそれよりやや大きい増加量である。（これらのプロフィールには最低55から最高145まで90ポイントのスケールの幅があることは特筆されるべきである）

IDIの主要スケール（1.0から5.0の範囲で）には、これらの控えめな増加量が下降する地点が反映されている。すなわち、否定／防衛スケールの測定値は、そのスケールの「解消済」の部分で下降するが、そのことが示唆するのは、学生が一般的に文化的差異に関心があり、かつ「自己」と「他者」に線引きされたものとしては世界を見つめていないことである。逆転スケールの測定値が

（「解消途上で」）示唆するのは、学生が自分自身の文化への否定的な認識を解消していく過程にあるのだろうということである。最小化スケールの測定値が（「解消途上で」）示唆するのは、学生が未だ、決定的な文化的差異を識別するのに十分なだけの経験または教養がないことであり、そのうえ他の文化のほうが彼らよりも共通性を持っていると思いつけているということである。受容／適応スケールの測定値が（「解消途上で」）同様に示唆するのは、学生が他の文化の論理や行動を未だ十分にはイメージができていないか、体験できていない、ということである。要約的周縁性の測定値が（そのスケールの「解消済」の部分の丁度初めの地点で）示唆するのは、文化に関する混乱したものの見方から離れて、平穏な状態で多文化的なものの見方へ移行していくスタート地点である。

2. 海外研修旅行参加学生の旅行前と旅行後の比較。  
海外研修旅行をした学生の旅行前と旅行後の、異文化感受性の自己認知プロフィールおよび発達度プロフィールは、短期間の海外経験にもかかわらず、大きな増加を示している。表3に詳細が示されている。

旅行参加学生	異文化感受性自己認知	異文化感受性発達度
開始時 (n=31)	117.44	81.58
終了時 (n=31)	119.35	85.39
増加=	1.91	3.81

表3. 海外研修参加学生の海外旅行直前、直後の IDI 異文化感受性の自己認知および発達度プロフィールのスコア

表3はまた旅行前から旅行後でみると約1.9%、学生の異文化感受性自己認知プロフィールが増加している。異文化感受性発達度プロフィールも3.8%増加している。これらの増加量はクラス全体のものよりは大きいとはいえ、控え目なものにとどまっている。加えて、特定のスケールの全体的な輪郭が、カリキュラムの課程を終えた2006-08年コーホートのものに類似したものとしてとどまっているが、いくつかの興味深い違いはある。最初に、否定／防衛スケールはより大きな変化を示しており、それは、文化的差異が否定的に受け取られる観点から、文化的差異が肯定的に、少なくとも興味深く受け取られる観点への、いくぶん強めの変動があることを示唆している。加えて、要約的周縁性スケールは、文化的なものの見方が混乱している状態から文化的アイデンティティの解答が出た状態への、はっきりした進展を映し出している。

3. 2006-08年コーホートの旅行参加学生と不参加学生の比較。

2006-08年コーホートを海外研修旅行に参加した学生と参加しなかった学生に分け、彼らの入学時と卒業時のIDIプロフィールを再調査すると、学生の、異文化にわたる理解能力の発達に対して我々が明らかにした事柄に、いくつかの細目を付け加えることができる。表4は旅行参加学生と不参加学生のグループのIDIプロフィールのスコアを示している。

2006-08年旅行不参加学生	異文化感受性自己認知	異文化感受性発達度
入学時 (n= 28)	117.04	82.23
卒業時 (n= 21)	118.2	84.04
増加=	1.16	1.81

2006-08年旅行不参加学生	異文化感受性自己認知	異文化感受性発達度
入学時 (n= 28)	117.04	82.23
卒業時 (n= 21)	118.2	84.04
増加=	1.16	1.81

表4. 2006-08年コーホートを、旅行参加学生と不参加学生に分けての 異文化感受性の自己認知および発達度プロフィールの比較

2006-08年コーホートを旅行参加学生と旅行不参加学生に分けることで、我々は、異文化感受性の自己認知および発達度プロフィールのスコアに少量の増加を認めることができる。すべての事例において増加量はあまりにも少ないので、無意味な変化量である可能性を排除することはできないが、これらの増加量は2006-08年コーホート全体を合わせたものに認められる増加量と似ているように思われる。旅行参加学生に認められる増加量は、IDIが旅行の直前と直後に執り行われ時に（表3で）見られる増加量ほど大きくない、ということは特筆されうる。さまざまなスケールの測定値が、グループ分けされていない2006-08年学生コーホートの測定値と類似している。

これらのデータから我々は以下の所見を得ることができる。2006-08年コーホートのデータは（旅行参加学生と旅行不参加学生を合同したものも分離したものも両方とも）IDI測定値の少量の増加をしめしており、それが示唆するのは、おそらく我々の2年間の国際文化学科のカリキュラムの体験が、学生の異文化感受性の発達を養成しているのだろう、ということである。研修旅行前と旅行後のIDIの測定値は、なおも控えめなものとはいえ明らかな増加がみられ、全体との相違が示唆するのは、海外体験が比較的強烈で即効性のある影響をあたえるというこ

とである。2006-08 年コーホートの海外研修参加学生のグループを調査すると、2 年間というより長い期間を経ると、IDI 測定値の伸びは、旅行直後のものよりも劇的ではなくなることが分かるが、そのことは、時間が影響力を減少させることを示唆している。しかしながら、旅行不参加学生よりも参加学生の方がより大きな伸びを示しているという事実は、短期大学在学期間中もある一定の効果が続くという可能性を示唆している。しかしながら、IDI スコアに対しての標準的取り組み方はまだ発展途上にあるため、ただ一つの学年におけるわずかなスコアの伸びの意味が過大評価されてはいけない。

#### 4. おわりに

以上、2006（平成 18）年度から 2009（平成 21）年度の 4 年間の核となるプログラムを報告した。IDI を用いた分析は、今後、より詳細な検証が予定されている。1 年次の早い段階での短期海外実習が、どのような効果をもたらしているのかあるいはいないのか、を検証することは、異文化理解促進のより有効な方法の検討にも貢献できるはずである。

2010（平成 22）年度以降、現地研修先の変更も含めた授業内容の見直しを行い、より効果的な海外研修のあり方を検討しているところである。また、学生の異文化理解の促進は、海外実習のみで可能なものではなく、事前・事後の研修はもちろん、その後のカリキュラム全般をとおして達成されるべきものである。本稿は、このプログラムに長く関わった 3 名が執筆したが、学科教員の多くが、演習担当はもちろん、事前・事後研修に関わっていることを付け加える。

付記：「国際文化理解演習」担当教員（2006（平成 18）年度から 2009（平成 21）年度）

Catlin EVANS, Christine WINSKOWSKI, 石橋敬太郎、熊本早苗、高野淳一、菅田慶信、吉原秋（順不同）

#### 参考文献

- Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience*, Yarmouth, ME: Intercultural Press, 47-70.
- Hammer, M. R. and Bennett, M. J. (1999, 2001). *The Intercultural Development Inventory Manual*. Portland, OR: Intercultural Communication Institute.
- Winskowski, C. and Hanna, C. M. (2005). Measures of progress in foreign language and cross-cultural awareness: A preliminary report. 『言語と文化』第 7 号、岩手県立大学言語文化教育研究センター、33-42.
- 岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科、文部科学省平成 18 年度「特色ある大学教育支援プログラム」（特色 GP）申請書  
<http://www-mori.iwate-pu.ac.jp/gp/>